

Eureka XII

六年制通信 No.35 令和7年1月24日(金)号

古いものから学ぶ

どの分野でもそうでしょうが、言葉の世界にも現在の現象だけを考えていては理解のできないことがあります。歴史的な視点を持ち、比較的に検討することでようやく現在の姿の成り立ちが理解できる、そんなことが多々あります。少し難しいと思いますが、近代言語学の父と言われるソシュール (Ferdinand de Saussure) が『一般言語学講義』(実はこれ、お弟子さんたちがソシュールの講義をまとめたものなのですが)の中で、言語学には通時言語学と共時言語学という二つの局面があつて、通時 (diachronic) は歴史的な研究で共時 (synchronic) は今の姿の研究であると、そして、これはソシュールが意図したのかどうか怪しいと私は思うのですが、通時と共時では共時の研究の方が言語研究としてはあるべき姿だと、そうとれるようなことを言っています。言語学の父に逆らうのは難しいのですが、現代の姿を理解するには歴史を知らないと無理だという立場を私はとります。

英語の世界では有名な話ですが、ある日、朝の挨拶で友だちから **Good morning!** と言われたところ、その日は体調が悪くつい **Bad morning!** と相手に言ってしまったという話があります。そんなに深く考えずに **Good morning!** と言われたのを「good な朝なものか、今朝は bad だよ」とその日の自分の体調を反映して **Bad morning!** と返したのですが、これは大変失礼になります。朝の挨拶は、丁寧に言えば **I wish you a good morning.** ですから、ここの good を bad に変えたことになるわけです。これはいけませんね。ついでながら、この英文から a good morning は目的格 (目的語) であることがわかります。つまり **Good morning!** は「いい朝ですね」ではなく、「あなたにとっていい朝でありますように」という意味なのですね。悪い朝でありますように、ではまずいよね。英語の語形だけではわからないのですが、ドイツ語では **Guten Morgen!** (グーテン モルゲン) と、はっきり目的格の語尾をしています。

最近職員室で、「W」の読み方について英語の先生方と話しました。これ、私も中学生の時に習って以来ずっと「ダブル」と思っていました。もちろんアルファベットを読むときは「ダブリュー」と発音していましたが、むしろ英語の文字というよりは「ダブル」という日本語として記憶していたように思います。意味は「2倍」ですよ。ところが、学生時代にどういう場面だったか忘れましたが、「W」は「ダブリュー」だから、ということは「ダブル ユー」、つまり U が二つということだと気がついたので。それまで気がつかなかったことがむしろすごいですね、我ながら。しかしスペルを見ると U ではなく V が二つで W ですよね、どう見ても W はダブルユーで

はなく「ダブルヴィー」でなければ理屈に合わないではないかと思ったわけです。しかもイタリア語ではWは「ドゥプル ヴェ」と言いますから、ダブルのVなのです。英語はおかしいではないかということになって、恩師は怖いので別の先生に質問をしたら「英語はあれだね、筆記体で考えたんじゃないかねえ」とのこと。確かに筆記体ならUが二つあるように見えます。もちろん、これは嘘。この先生は適当に冗談をおっしゃっただけです。本当は今から千年以上前の英語、これを古英語と言いますが、その時代にはVという文字がなかったのです。正確に言うとVとUの区別がなかったのです。iとjの区別もです。Wという文字をUUとUを二つ並べて表したりもしていました。確かに、ダブルのユーですな。こういう問題は現代の現象だけをいくら考えてもわかりません。しかし歴史的観点で見れば一瞬で解決します。こういう経験をするとき synchronic よりも diachronic な考え方に魅力を感じるようになりますね。

言葉のことではないのですが、現代は古いものはよくないもの、新しいものはいいものといった風潮が色濃くあるように思います。目に見える物でも見えない制度のようなものでもです。何でも古いものを切り捨てていくことに不安を感じます。温故知新を持ち出すまでもなく、古いものの中には現代が参考にすべき善なるものがたくさんあるように私は思います。古いということは長い時間をかけて使われてきたということです。良いものだから使われてきたはずなのです。悪いものなら使われることもなく、従って古くなる間もないわけですから。もっと見直されるべきですよ。

註) diachronic の dia-は英語の through、chrono-は「時」、ギリシア神話の「クロノス」は聞いたことがあるでしょう。synchronic の syn-は「共に」、「シンクロ」は知っていますね。あれは「同時」という意味なのです。

今週のおすすめ

・東野圭吾 『仮面山荘殺人事件』 (講談社文庫)

結婚式を一週間後に控えて、婚約者の朋美が事故死します。車でガードレールを突き破り、崖から転落したとのこと。二人が知り合うきっかけになったのも交通事故なのですが、それは本文を読んでもらうとして、朋美の父が所有する別荘に関係者が集まり朋美を偲ぶ会をしようとしているところに二人組の銀行強盗が現れるところから事態は急展開します。運転に慎重な朋美だから、あれは事故ではなく誰かに殺されたのではないかという話をし出す者が出て、何と強盗もこの話に興味を示し、謎解きが始まった矢先、状況から見て強盗たちが犯人とはとても思えない殺人事件が発生します。今度はこっちの犯人探しが始まるわけですが、犯人は全く動機の見当たらない偲ぶ会に集まった8人の中にいるとしか思えないわけです。どんどんお互いに疑心暗鬼になっていく中、何とか犯人に辿り着いたと思ったところ、最後にどんでん返しが待っています。これ、途中の展開に強い違和感を覚えるので、きっと展開としてはこうなるのだろうと予想しながら読みましたが、犯人は当てることができましたが、それ以外は全く予想外でした。ま、いつもながら東野さんの想像力には舌を巻くばかりです。また『容疑者Xの献身』を読みたくくなりました。

BGMは 西野カナ の ダーリン でした…。